

バンガラデシユ 国際子ども映画祭

二〇〇九年一月二四日から三〇日にかけて、バンガラデシユの首都ダッカにおいて「第二回国際子ども映画祭 (International Children's Film Festival)」が開催された。この映画祭は「子どもによる、子どものための、子ども映画祭」というにふさわしく、参加者はもちろんのこと、出品、選抜、運営のすべてにおいて、一八歳以下の子どもたちが主体となっている。

四〇カ国から五六作品が集まる

上映作品には、おとなが子ども向けに制作した映画やテレビ番組、子どもを主人公またはテーマとした映画、そして一八歳以下の子どもが監督制作したフィクションとドキュメンタリーなど、四〇カ国から計一五六本の作品が集められた。期間中には、シンポジウムやワークショップも数回開かれた。

映画祭のメインは、一八歳以下の監督によって制作された映画のコン

ある。映画監督や関係者、教育者、NGO職員などによって構成された「バンガラデシユ子ども映画協会 (Children's Film Society, Bangladesh)」が、この映画祭を組織している。同協会は、映画祭開催のほか、バンガラデシユ国内各地において巡回映画上映会や子ども向け映像制作ワークショップを定期的に開いている。

世界的なビデオカメラの流通とカメラ付き携帯電話の普及は、バンガラデシユも例外ではない。こうした状況のなかで、先進国発展途上国を問わず、映像は情報受信の機会であると同時に、情報発信と表現のツールとして活用されている。

子どもたちに対して、まさに「読み書き」一両側面からメディアリテラシーが教諭される動きは広がりがつつある。映像制作を学んだ子どもたちは、自らを取り巻く社会にカメラを向け、表現し、映画祭のような場で発信する。

無力かもしれないが、無知ではない子どもたち

この映画祭のディレクターを務めるのは、バンガラデシユの代表的映画監督の一人であるモルシェドウル・イスラム (Moshedul Islam) だ。



国際子ども映画祭のオープニングセレモニー



国際子ども映画祭パンフレット

バンガラデシユの人びとは、映画を大きく二種類に分類している。一つは国内向けに制作される、歌と踊り、アクション、ヒーロー対悪役という単純明快なストーリーに特徴づけられる映画である。もう一方は、海外向けに作られる社会派系映画(後者は「International Cinema」と呼ばれる)である。モルシェドウル・イスラムは、後者の映画を主に制作している。

彼の映画は、現代バンガラデシユ

の抱える社会問題をテーマとしながら、自然の脅威と豊かさ、富の虚無と貧困の力など、観る者に多くを問いかける。

子ども映画協会と国際子ども映画



モルシェドウル・イスラム監督*

*のついでに写真とともにモルシェドウル・イスラム監督提供



モルシェドウル・イスラム監督映画作品「Durotto」*

ペティションである。応募作品のなかから上映作品、受賞作品を選ぶ審査員も、五人の子どもたちで構成されている。しかし、だからといって、映画祭が子どもに閉じたものではない。中央図書館をはじめとする

五カ所の会場で六日間開かれた映画祭には、子ども連れを含め、おとなの来訪者も決して少なくなく、のべ一万人以上が訪れた。

そうした来訪者の誘導、パンフレットやグッズ、飲食物の販売、上映スケジュールの管理のすべてを子どもたちが担う。映画という現代バンガラデシユにおける最大の娯楽かつメディアの一つに、子どもを対象化するだけでなく、参入させる場が形成されている。

社会にカメラを向け、表現しようとする子どもたち

とはいえ、この「国際子ども映画祭」の仕掛け人は、やはりおとなで

祭を始めるきっかけとなった作品『Durotto』(二〇〇四、英題『Alienation』邦題『ぼくはひとりぼっち』)は、バンガラデシユを代表する現代作家の一人フマユン・アフメッド (Humayun Ahmed) の原作。経済的に裕福な上流社会の籠の中で生きる少年が、駅で暮らすストリートチルドレンの兄妹と出会って一日を共に過ごすなかで活力を取り戻す。しかし、最後にはやはり両者の子どもたちが生きていく社会は別である現実を目の当たりにする。

この映画は、第一五回アジアフォーカス福岡国際映画祭(二〇〇五年)でも上映されている。

「無力でかわいそうな子どもたち」「それが開発と援助の文脈で語られるバンガラデシユの子どもたちに対する世界のイメージである。しかし、子どもたちは、自分たちがどのように見られているか、おとなたちは自分たちに何を伝えようとしているのか、そして自分たちは社会をどのように見ているのかということについて、決して無知ではないことを「国際子ども映画祭」は示している。

みなみで かずよ
南出 和余
日本学術振興会 特別研究員

専門は文化人類学。バンガラデシユの子どもの生活世界、子どもが大人になる過程について研究している。最近はその研究手法としての映像制作にも取り組んでいる。